西日本新聞　（第3種郵便物認可）

四元　康祐

「赤い点」
ある日本人家族への鎮魂歌

今から二十年ほど前、ミュンヘン近郊の観光名所として名高い「ロマンチック街道」で、ある日本人家族が交通事故に巻き込まれた。彼らはハンブルクに住む日系企業の駐在員一家、休暇で南ドイツを訪れていたのだが、何者かが猛スピードでこの家族の車を掠めて行ったらしい。衝突を避けようして車は道沿いの樹に激突、若い父親と母親、そして生後数カ月の赤ちゃんが亡くなった。事故を惹き起こした車はそのまま走り去り、今もって行方は分かっていない。

だがその日本人家族にはもうひとり、当時六歳の男の子がいた。そして彼だけが生き残った。不幸中の幸い…と言っていいのかどうか、異国で一瞬にして天涯孤独となった少年の身を思うと胸が痛む。私もかつては駐在員、休日ともなればふたりの子供を車に乗せてドイツ中を走り回っていたものだ。家族旅行を楽しむ彼らの姿が目に浮かび、そこに自分たちを重ねずにいることは難しい。いや今だって、たまに夫婦で外出したときなど、もしもいま万一の難にあったら、残された子供ふたり、親の葬式その他の手配も含めて、一体どうなることやらと、周囲に係累のない異国暮らしはまことに心細いもの。

さて事故から十年ほど経った頃、ひとりの日本人女性がミュンヘンへ映画作りを学びにやってきた。ミュンヘンは実はドイツのハリウッド、大きな映画スタジオに加えて、国立TV・映画大学なるものまで揃っているのだ。ひょんなことから事故のことを知った彼女は、ある疑問に囚われる。生き残った日本人の少年はその後どうなったのだろう？そしてその事故を惹き起こした犯人は、いまどこで何をしているのか？互いに顔も名前を知らないふたりを事故の記憶だけが結びつけている筈。その過去は、彼らの現在にどんな影を落としているのだろうか？

大学でドキュメンタリー映画などを製作する傍らも、彼女はその疑問を大切に胸に抱き続けこつこつと調査を行ってきた。そして今年の夏、それは一本の劇場映画として結実する。彼女の名前は宮山麻里枝さん、映画の題は「Der Rote Punkt（邦題・赤い点）」、八月のモントリオール映画祭をはじめ世界各地の映画祭に出品される予定である。

実は宮山さんは、以前この欄でも紹介したミュンヘン日本語補習校で教えていたことがあり、娘の担任の先生でもあった。そんな縁で私はここ数年、最初はドキュメンタリーとして構想されたこの映画が途中からフィクションになり、生き残った少年が少女に設定され直し、実際にはいまだに分からない犯人の正体が牧師や平凡な父親へと姿を変えながら、何度も大幅に脚本が書き換えられる過程を間近に見てきた。それがいわゆるドラマチックな効果を求めての改変でないことは明らかだった。宮山さんは事実から出発して、その背後に隠されている人間の魂の原型を、必死になって掘り起こそうとしていたのだ。巨大な悲劇に直面したとき、傷つけた者と傷つけられた者は、どうやってそれを受容し、和解することができるのか。互いにというよりも、その苛烈な事実そのものと。

映画祭への出品に先だって、ミュンヘンで試写が行われた。日独の俳優たちの演技も、宮山さんのご主人が担当した音楽も素晴らしいものだった。だがなによりも私の心を打ったのは、二十年という歳月を隔てて、異国に散った同胞の家族に注がれる鎮魂のまなざしだった。そのまなざしゆえに、事件は「不幸な出来事」から抜け出して、ひとつの普遍へと届いていた。この映画を観る全てのひとが、心の最も深いところで事故の現場（そこが「赤い点」だ）を訪れ、見えない花束を手向けるだろう。

生き残った少年は下関の伯母さんに引き取られ、立派に成人し今は山口で働いているそうだ。いずれ映画を御覧になる機会が日本にも訪れるだろう。うら若い女性の姿を纏ったもうひとりの自分と対面したとき、ふたりはどんな対話を交わすだろうか。

（よつもと・やすひろ＝詩人、ドイツ・ミュンヘン在住）

▶「赤い点」製作スタッフ。右から2人目が宮山監督、左端はご主人で音楽担当のヘルムート

▲事故現場（赤い点）には亡くなった家族の慰霊碑が立つ。映画の撮影もこの近くで行われた

文化

ファクス:092(711)6243
メール:bunka@nishinippon.co.jp

※随時掲載